

カウンセラーの研修	<input type="radio"/> 基本的な聴き手になるための技術習得 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 上手な聴き役になる</li> <li>• ボディ・ランゲージに気を使う</li> <li>• 言葉以外のメッセージや感情を読み取る</li> <li>• 聴いたことを言い換える</li> <li>• 黙り込んだり、怒ったり、泣いているときには慰めを与える</li> </ul> <input type="radio"/> 問題解決法の訓練
カウンセリングの実践	<input type="radio"/> 昼休みや放課後に実施
生徒カウンセラーの報告 (2週間に1度)	<input type="radio"/> 自分のケースについて、生徒カウンセラーの仲間、教師、専門のカウンセラーとの相談を実施

#### ④ ピア・カウンセリングの有効性と危険性

有 効 性	危 険 性
<ul style="list-style-type: none"> <li>• クライアントに近い位置に立つことになり、クライアントの詳細を十分に共感できる。</li> <li>• 同じ環境にいること、同じ時間を直接的に共有していることなど気軽な関係である。</li> <li>• カウンセラーが生徒なら、いじめっ子は先生に話せないことでも、心を開いて話す可能性がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 生徒カウンセラーが暴行を受けたり、脅迫されたり、いじめに巻き込まれたりするなどの可能性がある。</li> <li>• 相談がこじれたりしたときにはどのようにすればよいのかということを考えておかなければならない。</li> <li>• 生徒カウンセラーをバックアップするシステムを学校内に組織しておく必要がある。</li> </ul>

## 第3章 調査研究

### 1 いじめの実態調査（平成7年7月調査）

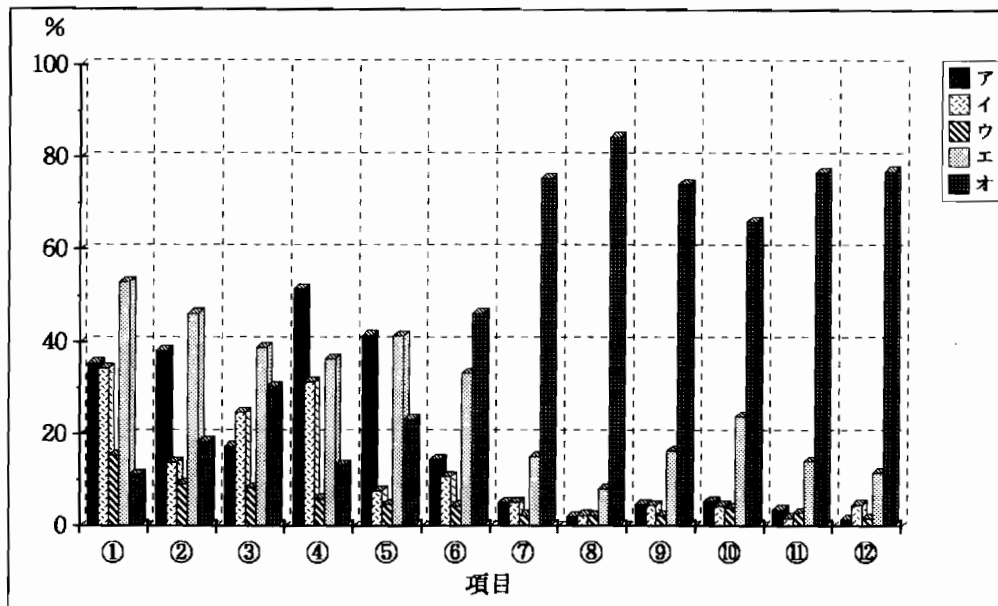
#### (1) 実態調査の概要

調査対象を小学校児童（6年生654人）、中学校生徒（2年生1,807人）、高等学校生徒（1年生1,361人）及び教職員（908人）を対象にいじめに関する意識調査と実態調査を実施した。

児童生徒の調査については、いじめの背景・要因及びいじめの実態を明らかにするために、児童生徒の友人関係、規範意識、ギャング・グループの体験の有無について調査した。さらに、児童生徒間のいじめの現状と解決の方法を把握するために、いじめの体験過程、悩み解消の手だて等について調査した。

教師の調査については、よりよい指導・援助の在り方を究明するために、いじめ予防のための実践、いじめの発見、いじめにかかわった児童生徒（いじめた児童生徒、いじめられた児童生徒、いじめを見ていた児童生徒）への指導・援助等について調査した。さらに、いじめ問題に対しての教師と児童生徒の意識の違いについても明らかにした。

## (2) 児童生徒のいじめの実態調査結果



いじめの体験過程

※小・中・高校生の全体を表す。

質 問 項 目	回 答
① みんなで遊ぶとき、仲間はずれにすることがありますか。	ア したことがある
② 「きたない」「バイキン」などと言ってからかうことがありますか。	イ されたことがある
③ 持ち物をかくすなどして、いやがらせをしたことがありますか。	ウ 止めるように注意したことがある
④ 口を聞かず、無視をすることがありますか。	エ そうしている人を見たことがある
⑤ ある人がさわったりしたものにさわろうとしないことがありますか。	オ 見たことも聞いたこともない
⑥ 黒板や持ち物に相手の悪口を書いていたずらしたことがありますか。	
⑦ 相手の服を脱がせたり、体にいやらしいたずらをしたりしたことがありますか。	
⑧ あぶない物を使って相手に命令したり、おどしたりしたことがありますか。	
⑨ 相手を呼び出してなぐったり、けったりしたことがありますか。	
⑩ プロレスごっこなどをして、遊んでいるように見せかけて痛めつけることがありますか。	
⑪ 弱い子どもをけんかさせてまわりではやしたてることがありますか。	
⑫ おどしてお金や物をとりあげたことがありますか。	

### (考 察)

いじめで多いのは、項目⑦～⑫の肉体的いじめより、項目①～⑥の精神的いじめであることが分かった。その中でも、特に項目①、②、

④、⑤の体験については3割から5割の児童生徒が体験をしている。それは、友達を仲間はずれにしたり、バイキンなどと言ってからかったり、無視したり、ある人が触ったものに触らなかったりなどである。項目②、④、⑤は、友達からみて違和感を感じたり、異質なものと受けとめられるといじめの対象になっていることが考えられる。その背景には清潔感のある暮らしやいいおいがよい社会というような考えが現在の子ども文化に入り込んでいると思われる。いじめる行為がきわめて感情的に処理されており、人権についての意識が低い

状況である。項目の無視することについては、ほぼ二人のうち一人は友達を無視したり、無視されたりした体験をしている。

肉体的いじめについては、相対的に少ないが、いじめられたことがある児童生徒やそれを見ていたことがある児童生徒が多いことを考えると、特定の児童生徒（またはグループ）が特定の児童生徒（またはグループ）にいじめをしていることが分かる。

集団によるいじめについては、項目②、④、⑤、で40%前後の児童生徒がいじめており、いじめられた児童生徒の比率は低く、それを見ていたことがある児童生徒の比率は高いことから、集団で特定の児童生徒をいじていることが考えられる。

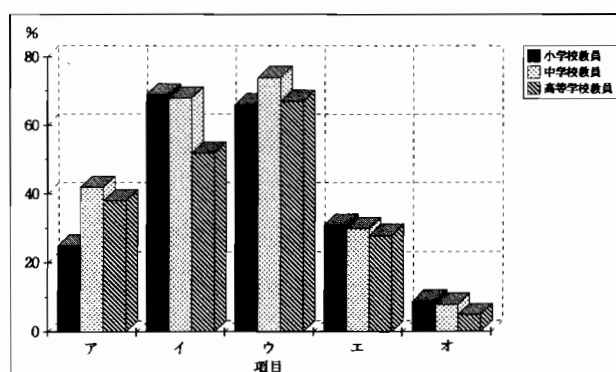
いじめを止めるよう注意したことがあるのは、全体的に低い。小・中・高の中では、小学生が一番高い。項目、④、⑤、⑦、⑧、⑨、⑩、⑫で中学生は低く、いじめを見ていても止めるよう仲裁に入る中学生は非常に少ない。

「いじめを見ていたことがある」の回答内容においては、ほとんどの項目について学校種別が上がるにつれ、その割合が増加してしている。これは、いじめの対象が特定の児童生徒に集中してきている現れと見ることができ、いじめを長引かせている原因の一つと考えられる。項目⑪に見られるように、弱い子同士をけんかさせて周りではやしたてることも行われており、周りの友達を意識していることが考えられる。

教師に見えにくいいじめの実態が浮き彫りになった。項目①～⑤のいじめにおいて見たことも聞いたこともないというのは1～3割程度である。特に、項目④の口を利かず、無視をする事実を知らない児童生徒は1割である。残りの児童生徒は事実を知っており、教師には見えにくい状況が生まれている。また、項目⑥～⑫のいじめにおいては、5～8割の児童生徒がその事実を知らない。

いじめの実態で特徴的なのが中学生のいじめである。12項目中、いじめた体験の小学生・中学生・高校生の傾向を見ると、8項目において中学生が一番高い。具体的内容では、項目①の仲間はずれ、項目②の汚い、バイキンなどと言う、項目④の無視、項目⑤のある人が触ったものに触ろうとしない、項目⑥の悪口を言う、項目⑧の刃物などで脅す、項目⑨の呼び出して殴る、項目⑪の弱い子同士をけんかさせてはやし立てるなどである。

### (3) 教師のいじめ問題対応に関する指導・援助状況調査



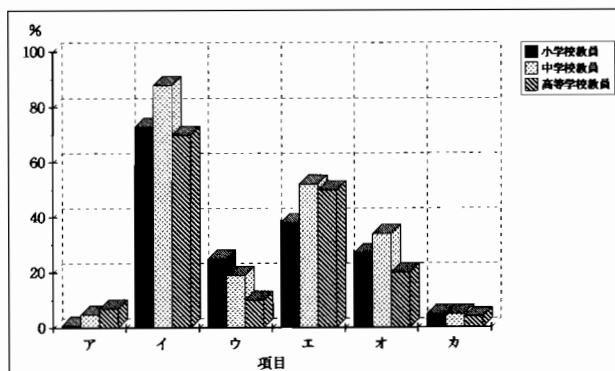
いじめた児童生徒への指導・援助

#### 【質問項目】

- ア いじめたことについて厳しく注意し、再びいじめないようにことばで強く指導する。
- イ いじめたことについて、どのように受けとめているかを聞くようにする。
- ウ いじめた理由を聞き、どこがいけなかったのかを反省させる。
- エ いじめ相手に謝らせ、仲直りをさせる。
- オ その他

いじめた児童生徒への指導・援助は、小・中・高等学校とも項目イ、項目ウが多く、項目ア、項目エについては少ない。項目イ、ウはいじめた側の気持ちを聴くなど教育相談的なかわりであり、項目ア、エは対症療法的なかわりである。このことから教師のいじめに対する対応の傾向は、どちらかというといじめた児童生徒の内面へのかわりを重要視した対応であると考えられる。

学校種別の割合の傾向から見ると、対症療法的なかわりについては、小学校より中・高等学校の方が多くなっている。教育相談的なかわりについては、高等学校より小・中学校の方が多くなっている。これは、中・高等学校のいじめは、小学校と比べて深刻化した緊急対応をせざるをえない状況にあることが考えられる。

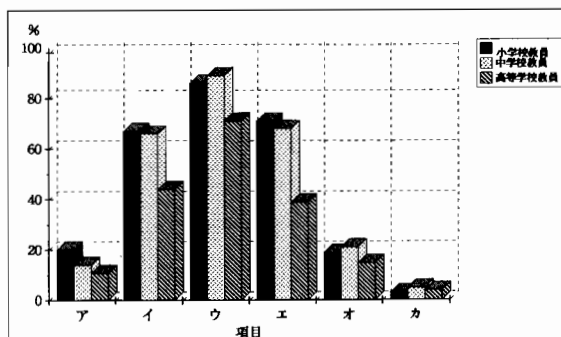


いじめられた児童生徒への指導・援助

**【質問項目】**

- ア 我慢するように話す。
- イ いじめられたことを、すぐに先生に相談するように促す。
- ウ いじめた子どもと仲直りをさせる。
- エ 負けていないで、自分でいじめに立ち向かうように励ます
- オ 「先生が解決するから」と安心させる。
- カ その他

いじめられた児童生徒への教師の指導・援助は、圧倒的に項目イの先生に相談するよう促すが多い。教師は、先生に相談するよう促してはいるが、現実には教師に相談する児童生徒はほとんどいない。ここに、教師と児童生徒のいじめに対する解決方法の意識の違いがあり、いじめが深刻化している原因になっていると考えられる。また、項目アの選択者は少ないが、「いじめられた子どもに我慢するように話す。」という指導・援助は、いじめられている児童生徒にとって、教師への信頼感を損なう対応であると考えられる。「いじめた子どもと仲直りをさせる。」については、小学校に比べて中学校・高等学校が少ない。このことから、中学校・高等学校の教師の意識の中に、児童生徒の年齢が上がるにしたがって、人間関係の修復が難しい状況にあるのではないかと考えられる。



いじめを見ていた児童生徒への指導・援助

**【質問項目】**

- ア いじめを止めようとしなかったことについて厳しく注意する。
- イ いじめを見ていたことは、いじめる側にあるということを実感させ、反省を求める。
- ウ いじめについて見たり聞いたりしたことを、すぐに先生に連絡させる。
- エ 朝の会、帰りの会でいじめ問題に関する全体指導を行う。
- オ いじめられた子どもの立場になって助ける方法を考えさせる。
- カ その他

いじめを見ていた児童生徒への教師の指導・援助は、小・中・高等学校とも項目イ、項目

ウ、項目エが多い。特に、項目ウの「いじめについて見たり聞いたりしたことをすぐに連絡させる。」については、児童生徒が教師にいじめが起きていることを知らせることは、「チクル」ということになり、自分が次のいじめの対象になることを恐れ、教師にはほとんど知らせてこない現実がある。ここに、教師と児童生徒の意識の違いがありいじめを深刻化させている。学校種別の割合の傾向から見ると、いずれの項目においても、小・中学校よりも高等学校の教師の選択の割合が少なくなっている。このことから、高等学校の教師は、周りにいる児童生徒への全体指導よりも、当事者の個別指導に重点を置いていると考えられる。

#### (4) 調査結果の分析と考察

##### 【児童生徒間のいじめの実態】

- ・ 無視、冷やかしの精神的いじめが肉体的いじめより大幅に多い。友達から見て違和感を感じ、異質なものと受けとめられるといじめの対象になっている。いじめの行為が極めて感情的に処理されており、人権についての意識が低い。
- ・ 集団による無視は、教師に気付きにくい状況である。
- ・ 精神的ないじめは、集団で特定の児童生徒をいじめているのに対し、肉体的ないじめは、特定の児童生徒またはグループが特定の児童生徒またはグループにいじめを行っている。
- ・ いじめを止めに入る児童生徒は少なく、校種が高くなるにしたがって傍観者が多くなる。
- ・ 中・高校生ほど異質な存在にむかつき、欲求不満のはけ口として、ゲーム感覚でいじめている。

##### 【教師のいじめ問題対応の現状】

###### ① いじめに対する予防の現状

- ・ 道徳の時間において、相手に対しての思いやりの心やいたわりの気持ち、友人関係等についての指導を重要視している。
- ・ 児童生徒と接する時間を多くとり、いじめにつながるような言動に注意している。
- ・ 児童生徒と面接を行ったり、交換日記を行ったりする教育相談的なかわりは、あまり行っていない。
- ・ いじめに関する校内研修（事例検討会、情報交換会）は行っているが、その割合は少ない。

###### ② いじめにかかわった児童生徒に対する対応の現状

- ・ いじめた児童生徒に対して、いじめたことについて厳しく指導をしているが、内面へのかかわりを重要視した対応が多い。
- ・ いじめられた児童生徒に対して、いじめられたらすぐに先生に相談するように促すことが多い。
- ・ いじめを見ていた児童生徒に対して、いじめを見たらすぐに先生に連絡するように指導することが多い。

#### (5) 調査研究のまとめ

- 児童生徒の人間関係が希薄化している。
  - ・ 小・中・高校生の交友関係は優しさや思いやりより、おもしろさを優先し、弱い存在を受け入れない素地ができています。
  - ・ 小・中学生はギャング・グループの体験が乏しく、異年齢集団で遊ぶことが減り、対人関係を学ぶ機会が減少している。

- ・ 友達がいても本音を出せない交友関係である。

## 2 いじめに関する発展的意識調査（平成8年7月調査）

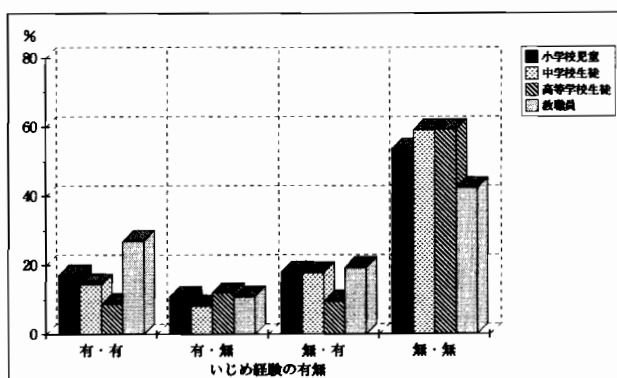
### (1) 意識調査の概要

児童生徒、教職員を対象にいじめに関する発展的意識調査を実施した。

調査については、調査対象を小学校児童（6年生457人）、中学校生徒（2年生508人）、高等学校生徒（1年生622人）及び教職員（565人）とし、同一の内容の調査項目とし、発達段階や立場による意識の比較検討をすることによって、児童生徒及び教職員のいじめに関する考え方や見方の意識を探ろうとした。

また、児童生徒のいじめられたときやいじめを見たときの相談する相手や相談をしない意識の内面を探ろうとした。

### (2) 児童生徒・教職員のいじめ経験の有無による調査結果の分析と考察



**【記号の説明】**

[有・有] いじめた、いじめられた経験がある  
 [有・無] いじめた経験だけある  
 [無・有] いじめられた経験だけある  
 [無・無] どちらの経験もない

#### ① 設問1 「いじめ」の背景や原因についてどのように考えていますか。

設問の視点	項 目
学校生活に起因	② 1 勉強や友達のこと、家のことなどで不満がたまっている 4 授業がおもしろくなく、理解できない ① 8 生徒がお互いに何でも話し合える友人関係ができていない
教師と児童生徒との信頼関係	5 先生が生徒一人一人を尊重してくれない 6 先生がいじめをなくす努力をしていない 7 先生と生徒との人間関係が不十分
家庭生活に起因	9 家庭が子どもの考えを尊重していない 10 家庭で「いじめは悪いことだ」と教えていない ③ 11 何でも言える親子関係が築かれていない
社会一般的な原因	2 暴力場面や人の失敗を笑ったりするテレビ番組の影響 3 学校、家庭、地域の連携が不十分 12 いじめの事件がテレビで放送されたり、新聞記事にのったりする

児童生徒同士の人間関係、望ましい親子関係や児童生徒と教師との人間関係及びストレスがいじめに大きくかかわっているという意識を児童生徒も教師も持っている。

いじめをなくすためには、児童生徒の一番身近なところにいる教師自身が児童生徒や保護者との関係に意図的に介入してよりよい人間関係を育てる必要がある。

※表の中の①～③は児童生徒、教職員の選択の多い順

② 設問2 「いじめ」解決についてどのように考えますか。

設問の視点	項 目
学校での解決の手だて	1 先生が分かる授業、楽しい授業をしてくれる 2 先生がいじめる生徒にきびしく指導する 11 先生が友達の大切さを教える
家庭での解決の手だて	③ 3 生命を尊重する意識を育てる 4 何でも言える親子関係を築く 5 家庭で「いじめは悪いことだ」と教える
自己解決の手だて	6 いじめられている子どもが「やめてほしい」と言う ① 7 何でも話し合える友人関係を子ども同士がつくる ② 8 「悪いことは悪い」と言えるようになる
社会一般的な解決の手だて	9 学校、家庭、地域との連携を深める 10 法律によって処罰する 12 大人が決まりを守ることの大切さを教える

いじめの解決には、児童生徒同士の人間関係の改善が必要であると児童生徒及び教職員も考えている。また、児童生徒、教職員とも「悪いことは悪い」と言えるようになるを選択していることなどからもいじめの解決のためには、児童生徒同士の人間関係の改善に着目した意図的介入による指導やいじめは絶対に許されないという毅然とした教師の姿勢が望まれている。

③ 設問3 「いじめる子ども」は、なぜいじめるのだと思いますか。

設問の視点	項 目
友人関係がうまくできない	6 過去にいじめられた ③ 7 一緒にいじめないと自分がいじめられる 9 友達との友人関係がうまく築けない
学校、家庭生活への不満	1 毎日の生活に不満がある 3 学校がおもしろくない 4 家庭がおもしろくない
いじめる側のわがまみや身勝手	① 2 遊び半分でふざけているという感覚 ② 5 相手が嫌いだ 8 友達に自分の強さを見せたい

児童生徒のいじめ経験の有無にかかわらず、いじめを「遊び半分でふざけているという感覚」「相手が嫌いだ」といった意識でとらえていることは、いじめは人を深く傷つけるという認識を育てることが必要である。さらに、「一緒にいじめないと自分がいじめられる」といった理由から児童生徒同士の人間関係の改善や「毎日の生活に不満がある」といった意識から発達段階に応じた児童生徒の気持ちを踏まえ、「いじめは人権を侵すも

のであり、絶対に許されない行為である」という姿勢で児童生徒の指導に当たることが大切である。

④ 設問4 「いじめられる子ども」は、なぜいじめられるのだと思いますか

設問の視点	項 目
人間関係の未熟さ	② 2 友達との関係がうまく築けない 7 先生との人間関係ができていない 8 集団の和を乱す
外的な要因	3 行動が遅い 5 過去に友達をいじめた ③ 9 他の人と異なる点がある
内的な要因	① 1 自分の意見をはっきり言わない 4 まじめすぎる 6 自分の意見をはっきり言いすぎる

いじめられる児童生徒の「意見をはっきり言えない」と「悪いことは悪いと言い切れない」姿が浮き彫りになった。このような児童生徒の気持ちを受け止め、親身になって相談に応じるとともに友達との人間関係をうまく築くことができず、集団の中にとけこむことができない児童生徒に対して、教師が意図的に介入し指導・援助していくことが必要になってくる。

⑤ 設問5 「いじめを見ている子ども」は、なぜいじめを見ているのだと思いますか。

設問の視点	項 目
積極的肯定	3 いじめを見ているのはおもしろい 7 遊び半分でふざけているから 8 いじめられても仕方がない人だから
消極的肯定	③ 1 自分には関係ないと思っている ① 2 かかわりをもたたくない ② 4 自分がいじめられたくない
あきらめの 気持ちや無 能感	5 自分ではどうすることもできない 6 いじめているグループが怖い 9 先生や親に言ってもどうせ解決しない

自分のことばかりに目を向けるのではなく、他者にも目を向け、友達との心のつながりを基盤に、その立場や心情を考え、適切な行動がとれる態度の育成が求められる。こうした態度の育成は、児童生徒だけに求められるのではなく、教職員自身も自らの態度を振り返り、児童生徒の行動を認め励まし、互いに尊重し合う姿勢が求められている。

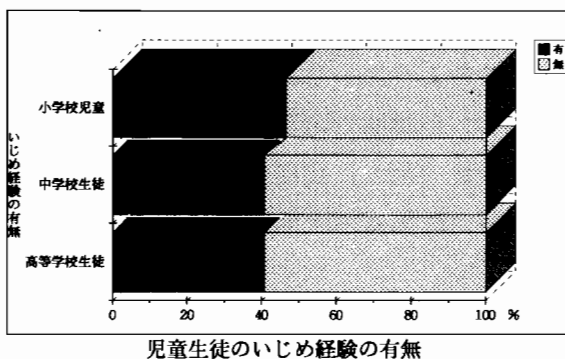
⑥ 設問6 もし、いじめられているとしたら相談しますか。

文部省による「児童生徒の問題等アンケート調査」結果によると、担任がいじめ問題にかかわったことによって「いじめがなくなった」と答えた児童生徒が4割～5割いることから担任の指導効果の大きさが浮き彫りになっている。しかし、本調査からは、担任に相談する割合は低いのが現状である。つまり、教師にとっていじめが見えにくく、把握が困難な状況となっており、いじめを教師がいかに把握し解決していくかが課題であると考えられる。

⑦ 設問7 学級の誰かがいじめられているのを見たら相談しますか。

設問6の「いじめられたとき」と設問7の「いじめを見たとき」の相談する割合は、小学生、中学生、高校生ともほぼ同じ割合である。しかし、「相談する場合に誰に相談するか」では、いじめられたときよりも、いじめを見たときの方が先生に相談する割合はかなり増えている。このことは、いじめを見ている児童生徒からの「先生」への訴えや相談を糸口にいじめ解決のための指導・援助が可能となってくることを示している。また、いじめられた場合やいじめを見た場合でも「友達」に相談する場合も多いことから、校内での相談しやすい体制づくりや相談しやすい教師の存在がいじめの解決の施策となる。

(2) いじめ経験による児童生徒の調査結果及び分析と考察



**【記号の説明】**  
 [有] いじめた・いじめられたのいずれかの経験がある  
 [無] いじめの経験がない

① 設問1 いじめの背景や原因

いじめ経験による項目の選択の割合に差はみられなかった。いじめの背景や原因では、児童生徒は、いじめをストレスのはげ口として行う傾向がある。

② 設問2 いじめの解決方法

お互いに何でも話し合える友人関係ができていないととらえており、友人関係を児童生徒がお互いに築いていくことによっていじめを解決できると考えられる。



### ③ 設問3 いじめる子どものいじめる理由

いじめを遊び半分や相手が嫌いだからという自分の気持ちのはけ口としていじめに走っている児童生徒が多い。いじめ経験による差は見られない。

### ④ 設問4 いじめられる子どものいじめられる理由

いじめられる児童生徒の「自分の意見をはっきり言えない」「いじめをやめるように言えない」といった内気な性格の面が見えてきた。

### ⑤ 設問5 いじめを見ている子どものいじめを見ている理由

いじめ経験による差は見られない。いじめの指導について、単に「いじめる側」「いじめられる側」に対する指導ではなく、日常のすべての教育活動を通してよりよい人間関係を築いていけるように指導・援助をしていくことが望まれる。

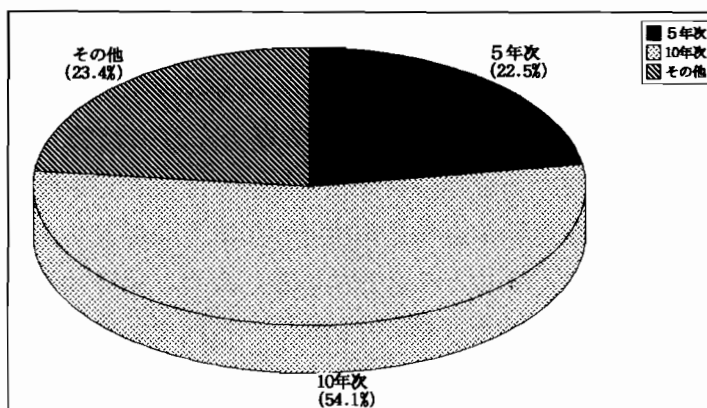
### ⑥ 設問6 いじめられていたら相談するかと相談しない理由

いじめられたら相談する割合が、いじめ経験の「有」の児童生徒が低い。これは、いじめられたときに相談した結果、相談された側の対応が十分ではなかったことを示唆しているものと思われる。

### ⑦ 設問7 いじめを見たら相談するかと相談しない理由

いじめ経験による差はなく、いじめを見逃すのではなく、積極的に対応しようとする意識を持っていることが分かった。

## (3) 教職員の経験別による調査結果及び分析と考察



調査対象の教職員の経験別人数の割合

いじめの背景や原因では、教師は児童生徒相互の人間関係に問題があるととらえ、児童生徒の人格形成上の親の養育態度が大きく影響していると考え、これは経験別に見ても意識の差は見られない。

いじめを解決するためには、児童生徒同士の間関係の改善が必要であるととらえている。これは、児童生徒も教職員も同様の意識である。

いじめをする理由として、いじめを遊び半分という感覚でとらえていることが分かった。このようにいじめを遊び半分でとらえている児童生徒に対して集団の正義感をどのように育てるかが課題である。

全体的な傾向として、経験年数の少ない教員は、児童生徒の個人に問題傾向を見出し、責任があるというとらえ方をしている。逆に、経験年数の多い教員は、人間関係のつまずきとしていじめをとらえている傾向が強い。